

AJEQ ニュースレター

秋季号（全国大会特集）の内容

ケベック研究を力強い流れに：小倉新会長
日本ケベック交流 40 周年記念事業について：宮尾編集委員
全国大会各セッションの要旨：各セッション司会者
開会挨拶要旨：シャロン顧問；全国大会を終えて：立花副会長

ケベック研究を力強い流れに：小倉新会長

日 本ケベック学会会員のみ
なさま、こんにちは。
第3期会長を仰せつかり
ました小倉です。

10月6日（土）に早稲田大学で開催された2012年度の全国大会は、日本ケベック学会が満4歳にして着実に成長していることを実感できた大会でした。開催校代表でもあった立花副会長をはじめ、ご尽力くださったすべての方々に心より御礼申し上げます。

今回のメインテーマは「フランス語憲章制定35周年」でした。この法律は制定以来多くの修正が施されていて、ケベックにおける言語問題の複雑さとともに、複数文化の対話にたいする人々の熱い思いが伝わってきます。ケベックはその意味でも非常に興味深い地域です。小畑前会長のこれまでのご献身に報いるためにも、研究の流れをせき止めることなく、サンローラン河のようなゆったりと力強い流れにしていかなばと、心新たにしています。

「ケベック研究」の面白さをできるかぎり学会内外に発信していく所存ですので、どうぞよろしく願います。（小倉和子）

日本ケベック学会 (AJEQ) の沿革

- 2008年7月29日 設立準備会開催（於明治大学）
- 2008年10月4日 設立大会開催（於明治大学）
- 第1期会長 小畑精和明治大学教授
- 2009年3月28日 臨時総会・研究会（於明治大学）
- 2009年10月3日 2009年度全国大会（於明治大学）
- 2010年10月2日 2010年度全国大会（於拓殖大学）
- 第2期会長 小畑精和明治大学教授
- 2011年10月1日 2011年度全国大会 UNIFA と共同開催（於東京日仏会館）
- 2012年10月6日 2012年度全国大会（於早稲田大学）
- 第3期会長 小倉和子立教大学教授



上：小倉会長、ダウ教授、小畑顧問
中：立花副会長、下：シャロン顧問

日本ケベック学会(AJEQ)とは

「日本ケベック学会」(AJEQ)は、日本でのケベック・フランコフォニーに関する学術研究・芸術文化交流などを振興し推進する学会です。ケベックやフランコフォニーにご興味のある方の参加をお待ちしています。

学会活動の詳細は以下のホームページ(HP)とブログをご覧ください。

HP: <http://www.ajeqsite.org/>

ブログ: <http://ajeq.blog26.fc2.com>

日本ケベック交流 40 周年記念事業について

来年2013年に、ケベック州政府在日事務所が東京に開設されてから40周年を迎えることを記念して、現在AJEQは、ケベック州政府の支援のもと、インタビュー・ビデオの作成と本の出版事業を進めています。10月現在、すでに10数人の方々にインタビューし、そのビデオをウェブに掲載しつつあり、年内には20数人のインタビューをすべて終える予定です。

他方、ケベック側でも同様のインタビューとビデオ作成が、州政府在日事務所のマルク・ベリボーさんによって進められており、フレデリック・バック氏やロベール・ルパージュ氏などが登場します。日本側と並べて公表の予定です。

また、本の出版についても基本的な方針が決まり、いよいよ本格的に動き出すところです。どうぞ来年の完成をお楽しみに。（宮尾）。

2012年度全国大会の各セッション要旨（司会者まとめ）



10:15-11:30 自由論題セッション（司会 寺家村博）

自由論題は、山出裕子会員（明治大学）と佐々木菜緒会員（明治大学大学院）の研究発表であった。まず、山出会員の発表は、カナダ連邦政府の多文化主義とは一線を画すケベック州が推し進める間文化主義政策と小説との関係を論じたものであり、具体的にはこの政策がいわゆる「新」移民の女性作家にどのような影響を与え、またその影響が作品の中にどのように投影されているのかを、主人公のアイデンティティの形成を軸に克明に分析したものであった。佐々木会員の発表は、ケベックの女性作家アンヌ・エペールとガブリエル・ロワの作品を取り上げ、そこに描かれている病院と患者との関係を丁寧にたどることで現代社会の諸様相を浮き彫りにしていくものであった。



11:30-12:00 特別報告（司会 寺家村博）

韓国コングク大学の HAN Yongtaek 教授が、韓国における『ケベック事典』の出版計画について報告された。この事典は、韓国ケベック学会（ACEQ）が来年刊行を予定しているもので、HAN教授ご自身がその作成にたずさわられていることもあり、詳細をお聞きすることができた。まず韓国でのケベックの認知度の話に始まり、事典作成までの経緯と作成の意図の詳しい説明があった。次に、どのような項目を載せるのか、詳しい紹介があった。ACEQではケベック文学の専門家が多いので、どうしても文学に関する項目が現時点では多くなっているとのことであった。報告のあと、会場から事典の発行部数などについての質問が出された。



13:00-14:00 ケベックのコンテンポラリーダンス（司会 安田 敬）

世界を舞台にして活躍しているケベック出身の振付家エドゥアール・ロック率いるラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップスは、これまで数多くのアヴァンギャルドな作品を発表している。講師の岡見氏は、創立から現在までの30年余りを概観し、10本以上の短縮版のビデオ作品を上映して、ロック氏の思想、ムーブメントなど細かく特徴を解説した。世界的人気を誇るトップカンパニーの地位を保ち続けるためのポイントとなるダンサー、特に創立当時から活動しているルイズ・ルキャバリエを詳しく取り上げ、挑発的なスタイル、刺激的なダンスなどを分かりやすく映像で示した。さらに、古典バレエ「白鳥の湖」のビデオ作品を上映し、それと比較して、現在のテクノロジーを積極的に取り入れ、現代社会の様相を反映した作品への軌跡、およびその革新性と魅力を映像とともに紹介した。



14:15-15:15 基調講演：ドゥニーズ・ダウ教授（司会 矢頭典枝）

ケベック大学モントリオール校のダウ教授が、フランス語憲章制定35周年におけるケベックのフランス語をめぐる状況について、基調講演を行った。最初に9月4日に行われたケベック州総選挙の成り行きと結果について報告がなされ、与党に返り咲いたケベック党の今後の政治・経済的政策について解説された。また最近の世論調査結果をもとに、同州における言語使用状況とフランコフォンとアングロフォンとの関係および言語意識についての分析がなされた。最後にフランス語憲章の最初のバージョン（1977年）の序文に示唆されている当時のフランコフォンとアングロフォンの対峙関係、さらにケベック党による今後のフランス語憲章の修正案について論じられた。



15:30-17:15 シンポジウム フランス語憲章35周年（司会 小松祐子）

フランス語憲章をめぐる3件の発表と2名のコメンテーターによる発言、および会場との意見交換により、充実したシンポジウムとなった。まず、矢頭典枝会員（神田外語大学）が、社会言語学的観点からフランス語憲章の意義や影響を検証する発表を行った。丹羽卓会員（金城学院大学）は、ケベックのネイション構築においてフランス語が果たす役割を明らかにした。さらに、リ・シンジャ教授（成均館大学）はケベック詩人ジル・エノーの作品に現れた英仏の言語的軋轢を扱った。その後、ドゥニーズ・ダウ教授と竹中豊会員（カリタス女子短期大学）からの論評と会場からの質疑により議論はさらに深まりを見せた。ケベックにおけるフランス語憲章の意義を多面的に理解することのできるシンポジウムとなった。

開会挨拶の要旨:クロード=イヴ・シャロンAJEQ顧問

クロード=イヴ・シャロン州政府在日事務所代表

日本ケベック学会の第4回年次大会の冒頭で、このようにご挨拶できることを大変嬉しく思っています。特に、貴学会がケベック研究を発展させていることに敬意を表します。

本日の大会でのテーマである「フランス語憲章制定から35年」については、非常に興味深いとともに、取り組がいのある問題だと思います。なぜなら、この憲章は制定以来、すでに200以上の修正が行われているからです。おそらくこれほど修正された法律は、どの国にもあまりないのではないのでしょうか。その意味で、大変面白いとともに、なかなか難しいテーマで、私はよく黒澤監督の映画『羅生門』を比喻に出します。

つまり、羅生門の事件のように、見る人によって見方や解釈が異なり、一つに集約できないため、そのよ

うな多くの視点から交渉や対立の問題を理解すべきで、何か一つの真実を求めることはできず、この問題の取り扱いには十分注意が必要といえるでしょう。

さて、来年日本でのケベック州政府事務所開設40周年を迎えるにあたり、記念事業として本の出版とウェブ上でのインタビュービデオのプロジェクトをAJEQに進めていただいていることに感謝申し上げたいと思います。おそらく来年度のこの大会までには、出版された本やウェブ上に掲載されたインタビュービデオなどを皆様をご覧になれるはずです。

最後に、これまでAJEQの役員を務められた皆様に、貴学会の創設と育成の労を取られたことに感謝を申し上げ、そのなかでも特に会長の任にあたられた小畑先生には、心よりの敬意を表するものです。

それでは、本大会が皆様に取りまして実り多い会になりますよう希望しております。(訳:宮尾尊弘)

2012年度全国大会を終えて:立花英裕AJEQ副会長

立花英裕・早稲田大学教授

今回の大会は、2009年から数えて4回目にあたる。2009年大会はガブリエル・ロワとライシテという二つのテーマを掲げていた。2010年大会は、Lise Gauvin 教授の講演を一種の基調講演としてケベック文学を移動と定住の観点から検討した。2011年大会は、UNIFAとの共同開催となり、Micheline Milot教授と作家Dany Laferrière氏を招聘することができた。そして今回の2012年大会だが、昨年ほどの出席者数には達しなかったものの、予想を越えた人たちが集まり、熱意と緊張感に溢れた大会になったことは嬉しい。

ドゥニーズ・ダウ名誉教授の基調講演とシンポジウムによって構成された「フランス語憲章35周年」をめぐる発表と討議は、各発表者の発言がかみ合い、補完し合い、密度の濃いものであった。

シンポジウムに限らず各発表者の話を聴いていると、ケベックだけに限定されない視野がどこかに感じとられ、それが発表に緊張感を与えているように思えた。ケベック研究の存在理由を公に認めさせるにはどうしたらよいかを、各自が密かに問うているからではないだろうか。

(以上は「AJEQ資料集」に掲載された全文の抜粋)
資料集: <http://ajeq.blog.so-net.ne.jp/2012-10-16>

後記

創立4周年を迎えた日本ケベック学会の全国大会は、文学、舞台芸術、言語政策などが取り上げられ、ケベック学会がますます充実してきていることを印象付けるものでした。私もケベック文学についての発表をさせていただきましたが、文学的側面だけでは語りきれない、ケベック研究の多彩さを実感する発表の場となりました。今回執筆をお願いした方々には、お忙しい中、迅速に対応いただきましたことに、深くお礼申し上げます。どうか引き続き皆様のご協力をお願いいたします。山出(広報委員・NL担当)

AJEQ ニュースレター

年3回発行
発行人・小倉和子
編集人・山出裕子
日本ケベック学会

AJEQ ホームページ

日本でのケベックおよび
フランコフォニーに関する
学術研究・芸術文化交流を
振興し推進する学会のHP

日本ケベック学会(12年10月～)

●主要役員	広報委員会
小倉和子(会長)	山出裕子
竹中 豊(副会長)	小松祐子
立花英裕(副会長)	安田 敬
小畑精和(顧問)	宮尾尊弘
クロード=イヴ・シャロン(顧問)	

*シャロン氏は、ケベック州政府
在日事務所代表。